

独立歩兵第二百大隊は昭和十七年四月十四日、山形市において編成完結、初代大隊長陸軍大佐山下良眼、五月二十一日山西省臨汾に最終梯団が到着し、同地付近の警備に任ず。

七月十日～二十日、山西省孝義県付近、封晋汾陽南東方地区作戦、二代大隊長陸軍大佐早川鉄二、三代陸軍中佐石井富太郎。

昭和十八年四月五日～五月二十六日、大行山脈一帯の十八春大行作戦参加。七月一日～三十一日、山西省陵川県付近の十八夏大行作戦参加。四代大隊長陸軍中佐柏木求馬。九月二十二日～十一月二十日、山西省大岳地区一帯、十八秋大岳地区作戦参加。

昭和十九年二月、大隊は臨汾地区警備を独歩第二百一大隊に移譲。新たに第三十七師団（大陸打通作戦参加のため）より山西省王茅鎮付近の黄河河防警備を継承。二十二日より移駐開始、三月十日一切完了。

四月九日～十三日、山西省稷王山周辺地区肅正作戦参加。四月二十五日～五月五日、西北河南作戦参加。作戦終了と共に大隊は河南省河南村班村付近に進駐、

同地に橋頭堡構築し確保ならびに守備に任ず。五代大隊長陸軍中佐間野俊夫。八月二十五日、西北河南作戦における武功抜群にて、第一軍司令官より感状を授与される。九月十五日～十月二日、汾南地区山西軍撃滅作戦参加。

昭和二十年三月、六代大隊長陸軍大尉岡本一雄。三十一日、南村地区橋頭堡の守備を独警第二十八大隊に移譲し、第十三軍隷下に入るため中支へ転進。四月二十日、江蘇省宝山県着。陣地構築守備に任ず。八月十八日復員下令。昭和二十一年二月二十一日、九八六名内地帰還のため上海港出帆。佐世保上陸後、二十七日故郷橋岡に帰る。

勝兵団・我が戦陣の記

山形県 須藤 幸一

私は昭和十五年十二月三日、現役兵として盛岡に集合入隊し、北支で最初の現地教育を受けた初年兵であ

る。

翌日には個人装備の兵器や被服が支給され、軍服に着替え、恰好は一人前の兵となる。そして、六日には芝浦港から「暁に析る」の歌で送られ、勇躍、中国大陸に向かったのである。

一週間ほどで我等を乗せた貨物船「永興丸」は陸地の塘沽港に着いたが、輸送車が配車できず、三日ほど船内に待たされる。ようやく配車なったとのことで下船、実弾一五発づつ渡され、貨物車に乗り込み出発する。

石家荘の兵站で給養を受け、そこを出ると忽ち北部太行山脈にかかる。汽車は重畳たる山また山をあえぎながら走り、山を越えると畑が展げ明るくなる。

二日余りの汽車旅で着いた所は山西省霍県であった。昭和十五年十二月十八日、夜八時を過ぎていたと思う。徒歩十数分ぐらいで北兵舎に着く。

翌日は霍県城内の本部から増田部隊長や副官が見えて広場に整列した我等に長い訓示があり、その日は家郷への札状や便りを書かされた。その翌日からは容赦

無く猛訓練が始まる。訓練は熾烈を極めた。然も凜冽の酷暑である。そして食缶洗いや洗濯の水の苦労は大変なものである。煙草一本吸う時間さえない、二個以上は整頓、三歩以上は駐足だ。一週間を過ぎた頃の真夜中、けたたましい銃声。「非常呼集」がかかり、古兵等はすぐ出動した。北兵舎東方の大張村台上から射ってきたのだった。

教練も進み、各個教練から密集教練へ、そしていよいよ我等の重機関銃教練に入る。毎日の食事はねばりけ皆無のポロポロ飯、汁は皮ごとの馬鈴薯汁に太刀魚のぶつ切れが入っていたが、一ヵ月後の月例身体検査ではおおかたの人は体重が増えていた。

二月に作戦があつて、その留守に三中隊の南堡警備隊に派遣され、警備勤務しながらの教練であつた。こども一ヵ月位で北兵舎に戻る。そして三月末には一期検閲を受け、速成ながら一人前の兵となる。

四月に入ると中原大会戦が始まり、同年兵の半数は編成に組まれて参加する。我等七名は那須班長の下に下梁平村の台上に苦力を叱咤してトーチカ建設に従事

する。

六月になると中原会戦も終わり、参加将兵が帰隊すると共に各中隊の警備地交代となり、我が第四中隊は霍県の西方二八キロの地、汾西に行くこととなる。

ある日、人事係に呼び出され給与係の助手を命ぜられ献立表や記帳が仕事となったが、なにより辛かったことは毎週一回の糧抹受領であった。霍県の野戦倉庫まで四〇頭ほどのロバを引いた苦力を指揮して二八キロの山道を往復するのである。中隊からの護衛一個分隊は途中の僧念警備隊まで、そこから霍県までは僧念警備隊の一個分隊が護衛してくれるのである。我々のみ交代なしで五六キロを歩かねばならないのである。

野戦倉庫に着くや、慌ただしく糧抹を受領し、苦力を叱咤してロバに積ませ帰途につくのであるが、汾西に着く頃は真つ暗になっていた。

ここに駐留中も幾度か警備行軍に参加させられた。そして十二月に入ると部隊がらみの警備地交代で、今度行く所は嵐県の東村鎮という所で討伐しながらの移動だった。一週間ほどの行軍で新任地嵐県東村鎮に着

く。我が第四中隊は東村鎮よりさらに西北方一四キロ程行つた秦子村だった。この付近には夜になると狼が出没し、豚さえ持つていかれるとの事で村では飼つていなかった。

燃料の石炭を背中に積んで四、五頭の駱駝が三日おきぐらいに来た。その看貫（重量を計る）には私が立ち合ひだった。

その年も暮れて昭和十七年となる。家郷の正月を想い出させるように八路軍の伝單が警備地付近に撒かれた。厭戦気分をおこさせる文句が書かれてあった。

二月のある寒い日、確度甲の情報が入った。それは八路軍の一隊が日本軍警備隊を襲撃し、大戦果を収め、木会溝という山間の村で今夜祝の宴会が催されることと、我が横尾中隊は隊長以下主力を以て行動を開始した。夜陰に乘じ、進興峠を越えて木会溝を目指した。防寒覆面をつけ夜通し歩いた。そして木会溝を見下ろす山の中腹まで来て待機し夜明けを待った。その間、身をつんざく寒さである。

敵を前にして焚火も出来ず、声も出せない。ただじ

つとして寒さをこらえて待つ。夜明けも近い頃あい、静かに山を下り、部落の三〇メートル手前で先ず威嚇の擲弾筒一発を打ち込み、一斉に部落に突入する。不意をつかれた敵兵は右往左往の大狼狽、入り乱れての白兵戦となる。

この戦闘でこちらは一人の犠牲者も出ず、戦果は甚大ということで、たった一晚の出動だったが軍隊手帳には「木会溝の戦闘に参加」と記入されたのである。

この年の四月に、第六十九師団（勝兵団）が、新しく編成される第三十六師団（雪兵団）と独立混成第三旅団（造兵団）からの転属者と、それに各中隊からの重機手で機関銃中隊ができる。そして部隊の通称号は勝第四二一五部隊となる。部隊長は村川大佐であった。

新編成の中隊は大いに気合がかかった。演習、作業、寒稽古と独混時代と比べ暇のない毎日だった。

五月十四日、慌しく命令受領の喇叭が本部から鳴り渡った。各隊の命令受領者は時ならぬ喇叭に本部へ走る。命令は作戦命令で、「只今、興県方面で八路军の反動分子が反共独立軍を結成し八路军と交戦中だか

ら、日本軍に至急応援を頼む」との事である。目印の旗は白地に髑髏が書いてあるという。我が中隊も全員集合がかり、人事係から編成を達せられ、各分隊は装備を整え出発を待つ。

歩兵四個中隊に重機、山砲の各隊は夜十一時、東村鎮を出発。途中、寨子村から第四中隊が合流し興県へと向かう。十六日昼頃、呉家溝附近で尖兵が射たれる。忽ちそれを撃破し敵の本拠である興県を急襲すべくその日は夜を徹して急行する。

明けて十七日払暁、予定通り北方より二個中隊、川添より本部並びに山砲機関銃を含めた四個中隊で包囲、急襲したが、もう既に蛇の殻であって、僅かにオンドルの温みが残っていた。部隊は長時間止まることは危険との判断から部隊を結集し、二キロ程離れた部落で休息して、十八日十時帰隊すべく行動を開始した。すると、間もなく進路方向の山から敵が攻撃してきた。尖兵中隊がこれを撃破しながら行軍を続行したが、午後二時頃になると前方、左右の山々に敵兵が黒くなつて押し寄せてくる気配、我が部隊は完全に包囲されて

いたのである。

正に四面楚歌の声である。敵は喇叭を吹いて攻撃をしかけてくる。銃声は谷間に木霊して耳をつんざく。

我が軍はこれに一発必殺の射撃で応戦、近づく敵と白兵戦を交えつつ活路を見出すべく、二個中隊を以て中央突破攻撃に出る。夜の九時頃か突破部隊の勇敢な攻撃で撃退に成功、と同時に部隊は急行軍で山路の悪路を進む。人馬共に命がけの撤退行軍である。

十九日朝、田家会の部落に到着し、速やかに四方の台上を占領し陣地を構築し、一部の兵で朝食の準備にとりかかる。敵軍も我が軍と並行して来たもので、忽ち台上から射ってくる。日中は火兵戦であったが、夜に入ると勇敢にも敵は手榴弾を持って我が陣地に攻撃してくる。それにこちらは、月明かりをたよりに彼等が近づくのを息をこらして待ち伏せ、いよいよ近づく和白刃をかざして一斉に突撃し、夜叉のごとく白兵戦を交える。

稲田中尉は軍刀をかざして突撃したが帰ってこない。津軽分隊長は腹部貫通弾で戦死、吉田射手は両腕

を射抜かれる、次々と負傷者が出て戦力も激減する。

悲惨な情況は筆舌につくしがたい程である。何しろ投擲された手榴弾が陣内で数十発も炸裂するのである。

そうこうしている中に夜が明けかかる。敵の攻撃もひととき緩む。急遽、部隊は田家会に集結し、戦死者は馬にくくりつけ、負傷者は担架に、歩ける者には頑張れと励まして行く。後尾の中隊は敵の追撃を阻止しながら逐次後退する。東方の大満山を越えて友軍の警備地まではまだ三〇キロもある。綿のごとく疲れて命がけの撤退である。戦死者十余名負傷者三〇余名。この戦闘は全く敵のゲリラ作戦にはまった敗戦であった。

我等は第一線の常として敵情次第で年に数回の出勤を余儀なくさせられた。その後、長期の作戦では、十八年春の南部太行作戦がある。飯盒炊さんと食事以外はぶっ通しの行軍一五〇キロ余も歩き、どうしてかこんな時には敵と遭遇したくなる。少しの時間でも休めるからだ。

昭和十九年四月に東村鎮から蒲州に移駐する。渡支

以来初めて電灯のある兵舎で、快適な生活だったが、それも束の間、五月には西北河南作戦が始まる。

私は第一小隊長塚田少尉の伝令ということである。

以前、将校当番を命ぜられた時、人事係の高山曹長に自分は当番は駄目だと掛け合って、「命令」と一喝された経験があるので、当の塚田少尉に直ぐにこの度は銃手として活躍したいから交代してくれないかと談判した。塚田少尉は茨城県水海道の出身で色浅黒く気骨のある一風変わった将校だった。この河南作戦中も作戦会議では部隊長とは意見が合わず作戦終了後、壘部隊（独歩第十四旅団）に左遷され、その後の作戦で戦死している。

それで私に言うことには、「実は黄河の渡河戦で三分の二、情況次第ではそれ以上の死傷者がでるかかも知れないのだ、その時の予備銃手として自分が選んでとっておいたのだ、やりづらいだろうが頼む」と願われ、何とも致し方なく引き受けた、以上のような経緯がある。

さて事件のことであるが、その日、我等四年兵の発

案で、「この度の渡河戦で我等は黄河の濼層となる身だ、どうせあと数日の命なのだ」と三年兵を混じえて最後の会食をしようや」と一決したのである。

段取りとして場所は初年兵教育隊隣の空兵舎、時間は日夕点呼後速やかに集合の事、酒と料理は本部の炊事長である同年の吉田に頼む。その他、苦力にチャン酎を買わせて準備する。皆、心ウキウキ、日夕点呼が終わるやすぐさま約束の場所に集合し、吉田が心づくしの酒と料理で飲めや食えやと大騒ぎ、賑やかな宴会となったのである。

ところが九時半も過ぎた頃、突然、週番士官の塚田少尉が入ってきて、「誰に消灯延期の許可を受けているのか、すぐ班に帰って休め」と言っ出て行ったが、その後が大変なことになったのである。この宴会に厩週番上等兵の内芝が週番腕章をつけたまま一緒に飲んでいたのを見つけられてしまったのである。週番士官が出て行ったあと彼は厩に戻ったのであるが、時、既に塚田少尉は厩に先に行っていて、内芝が戻るやいきなり「勤務中、酒飲みとは何たる事だ」と拳で殴られ、

口から血を流していると当番の一人が宴会続行中の我等に知らせにきたのである。

同年兵一同、厩に急行した。すると内芝は口から血を流し痛そうに呻いている。どうやら下顎が割れているようだ。これでは放っておけないと週番下士官に通報し、本部医務室に連れて行く。診断の結果、やはり左下顎が骨折しているとの事でそのまま、馬に蹴られたことにして入院となる。

一方、おさまらないのがこちら四年兵である。週番士官とはいえ我等と同年兵なのだ、上官暴行も止むを得ないやるべしといきり立ったのである。明日なき命と殺気立っていたし、この大作戦を目前にして如何なる事件を惹き起こそうと、この作戦を中止してまで我等を軍法会議に送ることもないだろう、と相談がまともだったのである。

天兵団の隷下各隊は既に出動準備ができ、軍馬は嘶なき、満州からは工兵、戦車、自動車の各部隊が応援に到着しているのだ。そして洋兵団の一部は行動を開始していると聞く。風雲まさに急を告げている。そし

て何よりも我が中隊は村川部隊の虎の子といわれ、中でも我等四年兵は機関銃中隊の精鋭と自負している。我等を編成から外すことはどう考えてもあり得ないのだ。外せば戦力は半減する。このような背景をふまえての決行である。

我等同年兵は、入隊時三六名だったが、戦死、転属、他隊勤務等で約半分の二〇名ほどとなっていた。段取りとしてこの四月に任官した山口、青山、中畑の三名が塚田少尉の室に乗り込み、詫びをせよと迫る。そこで謝ればよし、若し高飛車に出たら外へ引き出し、袋叩きにすることとして実行にふみ切ったのである。

先づ山口以下三人が彼の室に上がりこんだ。外の我等は息をこらして中の様子を窺う。三人は内芝の怪我の状態を説明しその暴行を詫びるように迫ったのである。彼はうなだれて聞いていたが反省したのだろう。ややあつて素直に詫びたのである。

そして「この度の作戦は何としても君達が頼りだ。お互い協力し合つて最善を尽くして頑張ってもらいたい。頼む」と頭を下げたのである。いきり立っていた

外の我等も張りつめた気が抜けると共に大事に到らなかつた事ではっきりとして、いざ帰ろうという所へ山口曹長が軍刀を手にして現われ、「君等の不満はよく分かる。だが大作戦を前にして大義をあやまることのないようにせい。夜も更けている各自班に帰って休め」と言つて姿を消した。

その翌日、山口曹長によつて三年兵以下全員集合をかけられ、彼独特の覇気ある高い声で訓示が始まる、そして最後に「四年兵はこれまで数多くの戦闘を体験したいわば千軍万馬の中を往來したつわものである、これからは一層四年兵に対して勤めを励むように」と結んで解散した。

いよいよ五月七日、我が部隊は、本部、歩兵五個中队、機関銃、歩兵砲の七個中队、若干の留守兵を残し部隊あげての参加である。

部隊は延々長蛇のごとく、中條山を越えて黄河渡河点に進軍する。

五月九日未明、渡河点である河堤村に到着し、恩賜の酒を頂き、決死の覚悟で渡河する。渡河に気付いた

敵兵は対岸の陣地から一斉に銃砲弾を浴びせてくる。川幅は五〇〇メートル、工兵隊の鉄舟に伏して十字砲火の中、対岸に上陸する。

それはすさまじいもので、対岸の敵陣地からは耳をつんざくばかりの銃砲撃と鉄舟のエンジンの音が兩岸の山に木霊して、物すごく河面を覆う煙幕と、それを照らす照明弾の青い光、その情況を三浦天兵団長は、「舟中剣に伏して敵前を渡る、月下強襲砲煙を冒す、見よ天兵団破竹のごとく、先鋒既に抜く眉山の險」と謳いあげた。

渡河するや台上の敵陣地に迫る。月明の下「富士」「桜」の合言葉を交わしつつ敵味方入り乱れての白兵戦、中でも機関銃・長内隊長を先頭に指揮班は大奮戦。勇敢にも敵の迫撃砲陣地に突入、白刃をふるいたつた一二名で小銃五丁、迫撃砲二門を分捕つたのである。しかし残念ながら板垣衛生兵は重傷を負いて後送される。

作戦は延々と続き、とくに双廟付近の戦闘は熾烈を極め、一晚に五回も突撃を敢行し夜が明けたのである。

敵と遭遇しなければ連日行軍が続く、幾日か過ぎたある日、秦嶺山脈の東に展けた麦畑の中の広い一本道にさしかかる。麦は豊かに色づいていた。すると前方から後へ通伝「四列縦隊を作れ」とのことだ。小走りに間合いをつめて四列となる。すると突如、山陰から米軍戦闘機、カーチスホークP51が現われ、四列縦隊の真上を機関砲で雑ぎ倒すように数機が交代に射撃して来たのだ。

道の両側は二メートル余りの水路で、小銃分隊は素早く水路を跳んで麦畑に散開したが、歩兵砲、機関銃の馭兵はどうすることもでき甚大な被害を受けた。我が中隊は丁度柳並木のある部落にさしかかっていたので建物の陰や軒下などに避難して事無きを得た。銃手は直ちに高射用意し、飛来する敵機に八つの重機で一斉に打ちまくった。ほどなく敵機は去ったが、その後は日中の行軍はなるべく控えて夜行軍が多くなる。

作戦開始後一カ月を過ぎた六月十日、秦嶺山脈大迂回作戦の命令が下る。大秦嶺の山越えは苦難を極めた。

道なき道を入馬共に一歩一歩前進した。中でも最たる難所は秦嶺の峯あたり、名だたる險所魔天峰越えであった。石盤の切り立った隘路をどうしても通り抜けなければならぬので、馬の荷を下ろし、馬の腹にロープを縛りつけた上で、十数名の兵でそのロープを少しづつゆるめ恐れる馬を馭兵が無理に崖下の細い道に下ろすのだが、その道も断崖の上の道で、過って足を踏み外せば下は眼もくらむ千仞の谷なのである。全員命がけでやつの事で全馬を下ろし終わった時は、ほとと胸をなでおろしたのであった。

これより部隊は山を下るのであるが、間もなく暮れて夜になる。部隊は左右の山上に警備分隊を立て、そこで一夜を過ごすことになったが、夜半になると南台上の分隊は敵襲され死傷者を出す始末。夜も更けるとあちこちで銃声がおこり、小銃隊に続いて重機の我等も急な柴山をよじ登る。そこで空中で赤く炸裂する不思議な弾丸に見舞われたが無事朝を迎える。そそくさと朝食をすましました山を下る。

中腹まで下りたところ遙か眼下の平野を黄塵をあげ

て敵の大部隊が退却して行くのだ。最後尾の騎馬部隊が土煙りの中に見えかくれする。もし我が部隊がより早く平野に下りていて、この大部隊と遭遇していたら大激戦となったであろう。みすみす敵の退却する様を見過ごして麓へ下りる。

その後大敵と遭遇する事なく行動したが、六月末には作戦も終了し、再び蒲州へ戻ることなく黄河の右岸会興鎮に旅団本部、第八十五大隊は三庄頭に、そして我が中隊は槐樹凹に駐屯する。

暑い夏で、毎日裸で陣地構築作業に精出した。空襲をさけて夜間作業も続いた。野兔が多く、また、大きな蝗も多くいた。

十月末頃、人事係の高山曹長に呼び出され、日本馬の検血輸送を命ぜられる。大隊本部の乗馬、歩兵砲機関銃の日本馬全部の採血（試験管入）を太原の病馬廠まで届けるのだ。骨箱よりやや大きめの箱にぎっしり試験管を立てて、割れないように綿をつめ、箱を白布で包み遺骨のように首から胸に下げ、歩兵銃の代りに拳銃を携行し、黄河を舟で渡り、中條山を越えて運城

に出る。

兵站に一泊し、翌日、同蒲線で太原に向かう。その夜は太原の兵站到泊り、翌朝八時頃兵站をひと先づ出て、北支派遣乙〇〇部隊（病馬廠）に行く。門を入ると守衛所があり、あかあかとストーブが燃えていた。守衛に案内されて行くと、担当の獣医中尉が出て来た。申告を済ませ、とある建物に案内され入ると、白衣の女子等数十人が一斉にこちらを向いた。いささか照れ臭かったが指示通り渡し終わり、帰りしな守衛に礼を述べて、今度は太原陸軍病院へ行く。

河南作戦で重傷を負い、ここで治療し中隊復帰した板垣衛生兵からの頼みのためだ。入院中、彼が世話になり相思相愛の仲になった尾山愛子看護婦への用事があるのだ。外科病棟に行き案内の衛生兵について長い廊下を行くと、奥まった所に衛生兵等の室があり「尾山看護婦は今、手術室にいるがすぐ終わるからここで待っててくれ」といわれて、暫く待つと体格のよい看護婦が入って来て「尾山です。どうもわざわざ御苦労様です」と言う、そこで板垣から頼まれた用事を伝え

る。近況などいろいろ話し合い、帰りに紙に包んだ菓子を入れてよこした。

その晩も兵站泊り、映画を観に出ようと思ったが、兵站での話しでは最近、憲兵がうるさくて駄目だとのこと、残念だが断念した。

翌日、帰隊すべく運城に向かう。丁度その日が明治節とあつて兵站では赤飯が振る舞われ、夜は映画館へゆく。轟夕起子主演の「キヤラコ」と、あと一本は時代物だった。三日目に会興鎮へ行くトラックが出ると聞き、それに便乗して無事帰隊する。

その年も暮れて、明ければ昭和二十年、正月過ぎ初年兵を迎える。

その後、会興鎮の厩勤務などとして、三月には対空射撃要員として旅団本部に配属される。黄河の茅津渡しを見下ろす台上に偽装網をかけた高射砲、用意した銃側で春の陽を浴びていた。対岸の畑は一面桃の花盛りで美しく、本間君が連れて来た仔犬とたわむれていたが、敵機が飛来すれば瞬時に射撃を開始した。

その頃、誰言うことなく部隊は中支へ移動するそうだ

と噂がひろがる。それが事実で、四月になると先発隊が繰り出し、第六十九師団隷下の各部隊は次々と転進する。

我等分隊は旅団配属を解かれ中隊復帰、今度は兵器係助手を命ぜられ中支へ移動時の兵器輸送に携わる。

部隊は行軍と汽車の旅を続け、五月上旬、新任地へ着く。師団は嘉定県へ、機関銃中隊は城外の兵舎に落着く。厩はクリークの向こう側で舟で往来した。

気候は良し、何より電灯生活が快適で喜んだ。落ち着いて間もなく太湖の仲の島、武進島へ陣地構築用の木材伐採の援護に中隊の主力をあげて行くことになる。

何処へ行くにも舟だから馬は必要なし。重機はいつも分解搬送だ。島に上陸したら水苗代や桑畑があり、養蚕もしていて故郷を思わせる。

七月になると任務も終わり島を出る。太湖を渡り無錫についた時は暗くなっていた。その後、蘇州では久しぶりに映画を観る。数日の舟旅で嘉定に帰る。

その後、中隊は嘉定から一キロ余り離れた所へ移駐する。

終戦の日、八月十五日、その日は暑く、我が分隊は三中隊の一小隊と木材伐採の援護ということで早目に昼食をすまし、カンカン照りの中、分解搬送で出勤した。途中まで行くと後から騎馬伝令が駆けてきて、すぐ中隊に帰れと言う。直ちにとつて返す。

中隊に帰ると全員集合がかけられ、遠山中隊長がおもむろに日本はポツダム宣言を受諾し終戦となった事を述べ、別命あるまで私物など整理しておくようにと言われる。必勝を信じ、東洋平和がくるまでと努力してきた今日までの過去を思い、各自複雑な気持ちで整理していた。

その後、演習や教練も一切なし。十月、ある雨の日、武装解除となり、兵器と名のつくものは全部返納した。馬匹返納には取扱兵として十数名が残された。

その後上海から数キロ離れた劉家溝に滞在する。何することなく毎日付近の農家へ稲の収穫の手伝いに出かけた。田の仕事がなくなると道路補修などにかり出された。この辺は十二月になっても山形あたりの秋の陽気で、霜のおりることはあったが、毎日が暖かく好

い天氣が続いた。

宿舎前のクリークでは、海に近いせいか潮の干満を利用して舟が往来していた。干潮の時は土手に無数の蟹が這いだしてバケツ一杯くらいはすぐ捕れた。部隊では無聊を慰めんと演劇なども催された。

そうこうして昭和二十一年二月になると復員の噂が流れ、一日千秋の思いで待った復員の命が部隊に下る。上海市役所の広場に整列し、私物検査を受け、その日の午後二時頃米軍の上陸用舟艇に乗り込む。舟足は早く翌日夕方には佐世保に着く。

船内ではいろいろなデマが飛び、皆不安だったが、故国の山が見えた時は到々帰ったのだと感慨無量。下船し尾張海兵団の宿舎まで歩く。一夜を過ごし南風崎駅から車中の人となり、一路帰郷の途につく。

中国大陸に五年余、青春と命を捧げて奉公した。だが少しも悔いと思っていないのが吾ながら不思議である。

【解 説】

第六十九師団独立歩兵第八五大隊(勝四二二五部隊)

昭和十七年三月二日、軍令甲八号により、独立混成第

十六旅団復員並びに第六十九師団臨時編成下令、編

成地山西省嵐県東村鎮、大隊長陸軍大佐、村川正一。

九月七日～二十日、山西省臨県周辺地区作戦参加。

十二月二十五日～三十日、汾陽北方地区作戦参加。

昭和十八年四月五日～五月二十二日、十八春大行山脈

作戦参加。

九月二十一日～十一月三十日、十八秋晉西北作戦参

加。

十一月二十一日～十二月二十八日、山西省離石県

(省中部大原西方) 西北地区作戦参加。

昭和十九年三月、警備移駐山西省永濟県蒲州着。

四月十五日～七月五日、西北河南作戦参加。

四月二十九日、大隊長陸軍中佐、西村勘次。

昭和十九年七月～昭和二十年三月二十五日、河南省

陝県地区橋頭堡の守備。

昭和二十年二月一日、在支部隊臨時編成(編成改正)

下令。

四月十四日、警備移駐江蘇省嘉定県嘉定着。三代大

隊長大尉、森田豊太郎。

八月十五日、復員下令。

四月十四日～九月二日、滬海道地区嘉定付近の守備。

昭和二十一年一月十三日、内地帰還のため主力

一、〇五三名上海出帆。十六日、佐世保市上陸。

編成以来の死亡者一八四名。入院患者四四名。生死

不明者一八名。入監者二名。計二四八名。外に転属

者一八二名。

追想 中支戦線

愛媛県 大原 四郎

昭和初期、白砂青松の続く我が古里の海岸は、漁師
が沖で釣をしており、経済大恐慌で日本国中は大揺れ
だった。幼き我々は余り関係なく、夏は六尺褌を肩に
紺のパンツにシャツ(手製)にて兄や友とよく泳ぎに
行った。

潮が引くと浜より沖へ二キロいや三キロも遠浅とな